

# ユズ(ユノス)

牧 幸 男

寒さが厳しくなってくると、お風呂に入って体を温めたい。最近、様々なハーブや、各種の浴用剤をお風呂に入れて楽しむ人が多い。高じて牛乳やリンゴ等を入れる人もいる。

日本人のお風呂好きが高じたのであろう。植物を浴用に使うのは、昔から伝わる5月5日の菖蒲湯や丑の日の丑湯、冬至のユズ風呂などみそぎ禊の名残かもしれない。この中で冬至のユズは最も親しまれているのではなかろうか。年の瀬のあわただしさが迫る一日、薫り高いユズ風呂に入るのは、ひと時の安らぎである。



撮影：埼玉県久喜市（日光街道にて）

ユズは、清少納言の『枕草子』（1000~1003）の82段、貝原益軒の『大和本草』（1709）、寺島良安の『和漢三才図絵』（1712）等古くから様々な書物に取り上げられ、日本人には古くから親しまれてきた果実である。

ユズは中国長江（揚子江）の上流、或いは西域が原産地と言われるミカン科の常緑低木で、わが国では人家や畑に植えられている。特徴は、枝に尖ったとげがあり、葉は互生長楕円形で、柄に広い翼がある。初夏、大きな白色五弁の花を開き、秋にはやや扁平球の液果を結ぶ。液果は熟すと黄色になり、外皮と内部は容易に分離できる。果皮はよい香りがあり、果肉は酸味が強い。この香りと酸味が日本人の口によく合うことから、調味料、柚釜、柚味噌（湯餅子）、食べ物の器など広く使われ、日本料理にはなくてはならない果実となっている。特に、柑橘類では珍しく東北地方まで栽培が可能な植物である。

ユズの記録は『和名抄』（932）に「柚、和名由」と記載があり、かなり古い時代に中国から渡来したものと考えられている。一方、渡来のユズと違いはあるが、在来の野生種も山口県に生育し、国の天然記念物に指定されている。中国では、『唐本草（新修本草）』（659）にユズの記述が「こかん胡柑」とあり、「胡」即ち、異域から伝わった植物とされている。このユズの仲間には、徳島県のスタヂ（酢橘）、大分県のカボス（芳酢）、九州各地のキズ（木酢）などがある。

ミカン属の中でユズは耐寒性が比較的強く年平均気温12~15℃位が適地とされている。寒さの厳しい長野県内では、飯田市より南で生育する植物である。現在の日本で栽培されるユズには主に3系統あり、本ユズとして「木頭系」、早期結実品種として「山根系」、無核（種無し）ユズとして「多田錦」がある。産地は農林水産省の統計では、昭和40年までは埼玉県が主産地であったが、45年以降は四国に移行している。

このユズ、成長が遅いことでも知られ、「桃栗3年柿8年、ユズの大馬鹿18年」などと呼ばれることがある。『二十四の瞳』の作者として知られる壺井栄（1899~1896）は、故郷の小豆島で「柚の大馬鹿十八年」ということを聞き、大変気に入ったという。「9年目の花ばかりを喜びとせず、気の長い18年を大馬鹿とのしりつつ待っている人間も人間らしく面白けれ、馬鹿と言われながらも結局は実をならせる柚もまた、おもしろいではないか」と述べている。

ユズの生育が非常に遅いので、栽培に当たっては、種子から育てる実生栽培の場合、



結実まで10数年掛かってしまう。このため結実までの期間を短縮する目的で、カラタチへ接ぎ木することにより、数年で収穫可能にすることが多い。

冬至とユズの結びつきは、実がなるまで長い年月がかかるので、風雪に耐えるシンボルとなり、お風呂で体を温め、寒さに耐える体になるようお願いが習慣になったのである。冬至の行事の記録は、漢の太初元年（BC104）の11月甲子朔日の朝、明堂で冬至を祀った記述が一番古い。わが国では、聖武天皇が神亀2年（725）11月1日に、冬至の賀（いわゆる朔旦冬至の祝賀）を初めて受けた記録が残っている。何故このように古くから冬至の行事が行われてきたかは、12月22日頃（旧暦の11月1日）は、一年で最も日照時間が短い日である。即ち、太陽の力も最も衰える日であることから、「一陽来復」を祈り、太陽の生命力の復活と、穀類の豊穰と植物の成長を心からの願いを示す行事になったと考えられている。

身近な植物であるが、詩歌の対象になるのは明治になってからが多い。

柚子の花 いつ咲きたるか 知らざりし 親指大の 実のつきており 大石美世子

残る日の 柚子湯がわけば すぐ失せぬ 水原秋櫻子

日本名はユズ又はユノスで、漢字は柚酸を当て、漢名は柚である。『和名抄』（932頃）には、漢名で「柚」、和名は「由」として表されている。植物名の由来は、柚酸の柚は木の名、酸は果実の酸味に基づいている。身近であった植物だけに、別名が多く、柚之酸、柚子、鬼橘、酸蜜柑等も使われる。中国で古くから柚子と呼ばれていたが、現在は柚子を分担（標準和名はザボン）と言い、柚子は香橙と呼ばれている。

学名はCitrus junosで、属名はギリシア名 kitron（箱、蒴からきたラテン名）で、レモンの木の古い呼び名である。種小名は四国・九州地方で使われた「ゆのす」に由来する。

漢方でのユズは、北宋時代の医書『図経本草』（1090頃編纂）には「古い処方になし」とあることから、比較的新しい生薬である。わが国では、生薬名を「柚」と呼び、顕著な抗消炎作用と、消化を助け、酒毒を解き、腸や胃の気を去るほか、利尿の効があるとされている。他に「果皮」は咳止め、消化、「花」は痰を除き、痛みを鎮める効果があるとされている。「ユズ湯」薬効の成分は特定されていないが、血行を促進させることにより体温を上昇させ、風邪を引きにくくさせる効果があり、肩こり、腰痛、神経痛、痛風、冷え症などに良いとされている。寒くて停滞しがちな時、ゆっくりと浴用するのも、せわしい年末の過ごし方かもしれない。

薬湯に入る習慣は、江戸時代に始まり、記録を調べると新年の丁子湯、5月の菖蒲湯、暑中の桃の湯、土用丑の日風呂（どくだみ 藪等を入れた）、12月の柚子湯がある。いずれも季節ごとにそれぞれ悪疫、災厄をはらう縁起の湯とされてきた。しかし、今日まで伝わるのは菖蒲と柚子湯のみである。

ユズを食用に使う場合、熟したユズでも酸味が非常に強いので、直接食することはない。しかし、ユズは日本料理の調味料の香味、酸味になくはないものである。他に柚子釜、柚子胡椒、ゆべしに利用したり、最近では柚子茶や柚子酒方面の利用も多くなっている。

太陽の蘇りを祈り、禊の湯にユズを利用するのは、日本人のナイーブな心の表れであろう。師走のあわただしさを忘れ、豊かな香気に包まれて、手足を伸ばす幸せをかみしめるのも一年に一度は経験したいものである。草川俊著『田園博物誌』（1976）菖蒲湯には匂いたつ季節のよこびがあふれていたが、柚子湯は沈んだ季節の悲しみがあつた。」とあるのは、年末を迎えての慌ただしさを感じる記述かもしれない。

花言葉は「健康美」「汚れなき人」「恋のため息」である。

